

谷崎潤一郎：新村出あてはがき：翻刻と解題：
「少将滋幹の母」執筆準備に関連して

奥野 久美子

Citation	大阪市立大学史紀要. 第 12 卷, p.85-80.
Issue Date	2019-10-31
Description	【訂正】 P 83 (107) 翻刻〈通信面〉の一行目 (誤) 残暑厳敷御處皆々様 → (正) 残暑厳敷候處皆々様
Type	Article
Textversion	Publisher
Rights	©大阪市立大学大学資料室
URI	https://doi.org/10.24544/ocu.20200122-002
JaLC DOI	10.24544/ocu.20200122-002

Placed on: Osaka City University

△資料紹介△

【大阪市立大学学術情報総合センター新村文庫所蔵資料紹介】

谷崎潤一郎 新村出あてはがき 翻刻と解題

—「少将滋幹の母」執筆準備に関連して—

奥野久美子

大阪市立大学学術情報総合センター（以下学情センター）所蔵の新村出博士旧蔵書（新村文庫、全七五七九冊）の中の一冊、『王朝三日記新釈』（宮田和一郎校註、昭和二十三年三月二十日 健文社発行）に、谷崎潤一郎の新村出あてはがきが、のり付けされた状態で挿まれている。学情センターによれば、受け入れ時の資料にもはがきのこととは記載がなく、これまではがきの存在を指摘されたことはないとのことであった。また書簡編のない最新の全集¹はもちろん、その前の愛読愛蔵版全集²の書簡編にも収録がなく、谷崎の新村あて書簡および新村の谷崎宛書簡をまとめて計9通翻刻・紹介されている細江光「第15回「谷崎潤一郎と京都」展資料紹介(3)」(『芦屋市谷崎潤一郎記念館ニュース No. 15』平成七年六月三十日)にもこのはがきは入っていない。管見の限りこれまで公開されたことのない資料であると思われるため、以下に翻刻・紹介し写真を掲げる。

・形態等

谷崎からのはがきは『王朝三日記新釈』の本文最終ページ(二二

四ページ)と、奥付ページとの間に、宛名面の右端をのりしろに、のり付けされている。そのため、宛名面右端、通信面の左端部分は解読不能。見える部分は、タテ14 cm、ヨコ8.3 cm。宛名面は「郵便はがき」の印字のほか「谷崎潤一郎」の名前部分が印字され、宛名や差出元住所は墨筆。切手に「238.7」の熱海の消印が押されている。学情センターによれば、挿まれていたはがきを受入れ時にのり付けするという措置は考えられないので、この本を受入れた時には既のり付けされていた可能性が高い、とのことである。

・『王朝三日記新釈』への書入れ

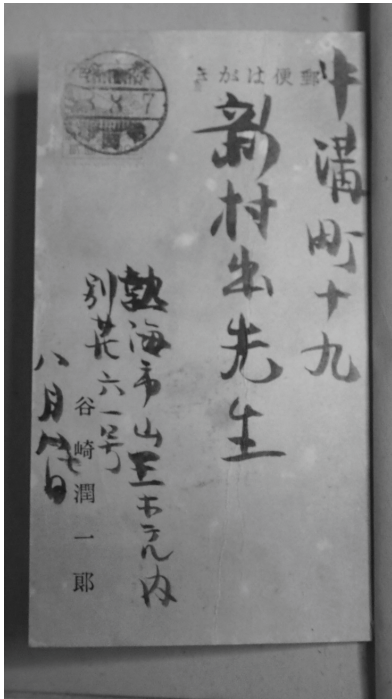
この『王朝三日記新釈』本体には、墨書された書入れ等が複数ある。表紙には、この本に収録されている「三日記」の題名「篋日記」「平中日記」「成尋母日記」が墨書。表紙ウラに「昭和二十三年七月二十七日／宮田氏来訪寄贈／新村出」(〽は改行、以下同)とあり、その左の見返しに「謹呈／新村先生 著者」と、先とは違う筆跡の墨書。こちらがこの本の著者(校註者)宮田和一郎の筆で、表紙ウラは新村出自身の筆と考えていいだろう。奥付の刊行日(三月二十日)から約四ヶ月経っているが、宮田が直接新村を尋ねた機会に寄贈されたことになる。扉に「新村家蔵」の朱印、扉ウラには「新村文庫」の黒色印のほか、学情センターでの受入れ時のものと思われる受入れ番号などの青色印、「44.331 受」という受入日付の黒色印が押されている。

本文5ページの「平中日記」の解題部分では、それぞれ墨書で「本

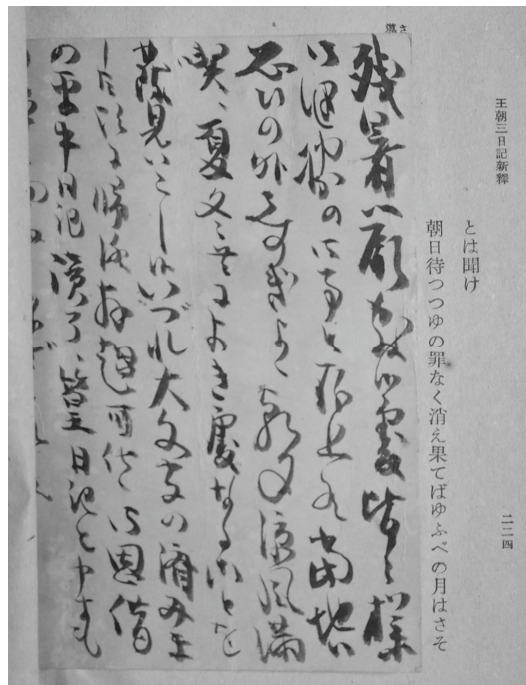
朝書籍目録」という箇所にかギカッコ、「静嘉堂文庫」という箇所に波線、「冷泉為相卿〔真跡〕」部分に傍線が付され、同じ解題中の8ページには「平中の」墨塗の話」という箇所に傍点が4つ付されている。三日記の本文中には書き込みがほとんどないが、「成尋母日記」の中扉ウラに「岩倉」と書かれ、頁数が7種類書かれている。続く本文中にも「岩倉」という地名に傍線があるので、「成尋母日記」から、岩倉という地名を抜き出した痕跡のようである。また「成尋母日記」の末尾に近い221ページで「蝶の飛びかかりたるやうに花咲くものなりける」という箇所と、二行後の歌の一部分「こてふに似たる」という箇所に、それぞれ朱筆で傍点が打たれている。『王朝三日記新釈』への書入れは以上である。

・はがき画像

〈宛名面〉



〈通信面〉



・翻刻

【凡例】

〔一〕内は翻刻者注記。改行ははがき本文に従う。削除は一重線で示し、削除に代わる文字には傍線を付した。

〈宛名面〉

〔右端確認不能〕

中溝町十九

新村出先生

熱海市山王ホテル内

別荘六一号

谷崎潤一郎〔印刷活字〕

八月八七日

〈通信面〉

残暑厳敷御處皆々様

御健勝の御事と存上候當地は

思ひの外しのぎよく朝夕涼風満

喫、夏冬共によき處なることを

發見いたし候いづれ大文字の濟みま

した頃に帰洛拝趨可仕候御恩借

の平中日記讀了、篁日記と申すも

のも中々面白く存ぜられ候〔*〕

〔左端確認不能〕

*この行はのりしる部分にかかっており、奥付ページを持ち上げて横からのぞき込めば部分が読めるという状態のため、推定含む。

・解題

まず〈宛名面〉について、宛先住所は右端が読めず、「中溝町十九」の部分しか読めないが、当時、新村邸があつた（現在は新村出記念財団がある）、京都市北区の小山中溝町であろう。消印と谷崎自身の書いた日付から、投函は昭和二十三年八月七日。谷崎は昭和二十一

年十一月に京都南禅寺の邸宅（前の潺湲亭）に転居していたが、二十三年年初には熱海の第一ホテルに滞在、友人の土屋計左右の厚意により、一月下旬から熱海の山王ホテル内にある土屋の貸別荘に移った^③。その後京都と熱海を行き来しており、注（2）の全集第二十五卷所収のこの頃の書簡では、二十三年七月二十六日の土屋計左右あて書簡（全集書簡番号三四六）は南禅寺からのもので、「月末頃より又一週間程熱海に参り候間」とある。次の書簡（同三四七）は八月九日、熱海山王ホテル内から西田秀生にあてたもので、「小生熱海にゐることハ誰にも秘密に願上候今月末に帰洛拝顔可致候」とある。九月四日（同三五〇）の奥村富久子あて書簡の差出元には、本はがきと同じ「別荘六一号」という表記があり、本文中には「十日ぐらゐのつもりで参りましたのが思ひの外こちらが涼しいのでつい長く相成」とある。同全集では熱海から出された書簡は九月四日のもの（同三五一、嶋中雄作あて）まで。九月二十四日書簡（同三五二、根津清治あて）は南禅寺からとなっている。本はがきが昭和二十三年八月七日に熱海山王ホテル内の別荘六一号から出されていることは、以上確認したこの頃の谷崎の動きと合致する。

新村出と谷崎の交友については、先掲の細江光「第15回「谷崎潤一郎と京都」展資料紹介（3）」の解説に、「谷崎とは、昭和の初め頃、上京途中の寝台車の中で会ったのが初対面だったが、本格的な交遊が始まるのは、戦後、谷崎が京都に住むようになってからである」とある。谷崎が「当世鹿もどき」（注（1）全集第二十三卷所収、初出「週刊公論」昭和三十六年三月六日〜同年七月二四日）で新村との出

会いと交遊を語っている。はがきの前年昭和二十二年六月九日には、谷崎、新村と吉井勇、川田順が、昭和天皇の御前で文芸を語る会を行っている(同注③)、および谷崎「忘れ得ぬ日の記録」注①全集第二十一巻所収)。先掲細江光氏紹介の新村・谷崎書簡では、本はがきに時間的に最も近いのは昭和二十二年十二月三日付の新村から谷崎への書簡で、前々日に谷崎に誘われ能楽鑑賞をしたことへの礼状である。同じく細江氏紹介の昭和二十六年二月二十五日、谷崎の新村あて書簡では、単行本『少将滋幹の母 乳野物語』(昭和二十六年三月 毎日新聞社)の題字揮毫を新村に依頼している。後述のとおり、「少将滋幹の母」執筆の際に新村から助手を紹介されるなど、助けられたことから依頼したのかもしれない。

次に〈通信面〉の内容については、新村から借りた『王朝三日記新釈』を読了したという礼状である。『王朝三日記新釈』については、谷崎自身が以下のとおり言及している。

此の篁の日記は、最近、と云つても昭和二十三年に宮田和一郎氏が注釈を加へ、平中日記、成尋母日記と併せて王朝三日記新釈と題して刊行されたのを、私は始めて読んだのであるが、巻頭の解題に依ると、此の書は従来三部の写本があつたのみで、宮田氏が昭和十一年に「篁物語」として公けにする迄は、世に活字本は行はれてゐなかつたやうである。私は実は、去年「少将滋幹の母」を書く時に平中物語を読む必要が起り、ちやうど折よく此の三日記注釈が出たのを広告で知つて取り寄せたのであつたが、私の興味は平中日記よりも却つて篁日記の方に多

く惹き付けられた。「中略」ありていに云ふと、私は少将滋幹を書きつゝある間もしばしば、此の日記のことが頭に浮び、これも小説に書いてみたいと云ふ気が動いた。しかし平安朝を背景にした物語を二つもつゞけて書くことも如何であるし、歴史物は史実や故実を調べるのが大儀なので、何となく躊躇してゐるうちにいつか感興が去つてしまつたのであるが、まだ此の日記はさう多くの人に読まれてゐないやうに思へるので、こゝに宮田氏の注釈を参考にして荒筋を述べ、ところ々々の情景を拾つて見るのも無益ではあるまい。「小野篁妹に恋する事」昭和二十六年一月「中央公論」、初出題「『篁日記』を読む」、注①全集第二十二巻所収)

この引用から、まず谷崎が「少将滋幹の母」執筆のために『王朝三日記新釈』所収の「平中日記」を参照したことは明らかである。また、『王朝三日記新釈』はその出版を広告で知つて自ら取り寄せたという。「少将滋幹の母」執筆に用いたことや、数年経つた二十六年にも同書に拠つて「小野篁妹に恋する事」を書いていることから、谷崎が新村から同書を借用しただけでなく、私蔵もしていたことは間違いないだろう。ではなぜ同書を新村から借りたのか。推測を試みれば、後述のように新村は「少将滋幹の母」執筆に際し谷崎が史実を調べるための助手を紹介するなどして谷崎を助けている。谷崎から何らかの内容で小説の構想を聞いていた新村が、参考資料にと、宮田和一郎から贈られたばかりの同書を熱海へ行く谷崎に持たせたのかもしれない。先述のとおり新村が宮田の訪問を受け同書を寄贈

されたのは七月二十七日。谷崎はその前日二十六日の書簡で月末には熱海に行くと言っているので、出発直前に新村に会っていればそのようなこともありえただろう。同書の奥付刊行日が三月二十日であることを考えれば、谷崎がそれ以前に同書を入力していた可能性も高いが、新村の厚意に依って読後の感想を書いた札状を送ったのかもしれない。はたまた広告で知ったというのは記憶ちがいで、新村からの教示で初めて同書の存在を知り、後から自分でも取り寄せたという可能性も皆無ではないかもしれない。

いずれにしても、谷崎がこのはがきで既に「篁日記と申すものも中々面白く存せられ候」と述べていることは、「小野篁妹に恋する事」の記述を裏付けるものである。

「少将滋幹の母」(初出「毎日新聞」昭和二十四年一月一六日〜二年二月九日連載)は、谷崎の自他共に認める傑作の一つである⁴。同作を収める注(1)全集第二十一巻の同作解題(藤原学執筆)に引用されている、当時の毎日新聞学芸部副部長、山口廣一の「谷崎先生の原稿」という文章によれば、同作について、「毎日新聞と先生との間に、小説掲載のお約束が出来たのは、それ(引用者注…連載開始の昭和二十四年十一月十六日)より一年半以上も前の、たしか昭和二十三年の春ごろのことだつたと思ふ。」とある。執筆時期については長野晋一⁵が「昭和二十四年四月から同年十月までの間」と推定し、構想時期については明里千章⁶が「細雪 下巻」を脱稿した昭和二十三年五月頃の谷崎は、すでに次の仕事に向かっていくつかの構想をもっていた。「多くの素材としての候補者のなかで少将滋幹、

良源元三大師(引用者注…「乳野物語 元三大師の母」、小野篁の三人に絞られ、最終的に滋幹が選ばれたことになる。とし、助手を務めた榎克朗の証言から、「このとき(昭和二十三年九月頃)すでに、谷崎の中ではかなりの部分まで構想が出来上がっていたのではないかと考察している。

その、助手を務めた国文学者の榎克朗氏による谷崎逝去時の追悼文「谷崎潤一郎氏と「少将滋幹の母」のことなど(追悼小記)」(大阪学芸大学国語国文学研究室「国語と教育」昭和四十一年一月)には以下のようにある。

はじめて谷崎潤一郎氏の訶咳に接したのは、たしか昭和二十三年九月十六日のことである。そのころ私は京大大学院(旧制)に籍を置いて、国文学研究室の最末席を汚していたのだが、主任教授でいらつしやつた沢瀉先生(引用者注…沢瀉久孝 京大名誉教授)から、「谷崎さんが、新村先生を介して助手を一人求めて来られたので、行つてみてはどうか」とのお言葉を頂いたのが機縁である。

この日谷崎は榎氏に続群書類従の「世継物語」の一節を示し、国経とうら若い北の方との間に子供があつたかなかつたか調べてほしい、と依頼。榎氏は滋幹という男子があつたことを見つけて後日報告。そのようにして大変な調査の日々が始まつたという。

先述のように谷崎は九月四日までは熱海にいたことが確実で、その後帰洛したわけだが、十六日には助手が榎氏に決まって来訪しているということは、帰洛後すぐに(あるいは熱海にいる間から書

簡で、京大名誉教授（当時は既に京大を退官）の新村に助手の紹介を依頼したのだろう。そのような二人の関係を考えると、やはり七月末に新村が谷崎に『王朝三日記新釈』を貸したのも、谷崎の関心のあり処を聞いていたための厚意だろうか。

最後に、谷崎が「少将滋幹の母」の構想を練る際『王朝三日記新釈』を座右に置いていたであろうことが、創作ノートからもわかる。

注(1)全集第二十五卷所収の創作ノート「潺湲亭」(8)の「二四ウ」に、次のような箇所がある。

庭に菊をうゑしこと(日記七二)

逢坂といふ仇名ありしこと(日記一一二)

平中と国経との贈答歌(日記七三)

「逢坂と」を除く二つは実際に「少将滋幹の母」に出てくる挿話であり、「七二」「一一二」「七三」は、それぞれ『王朝三日記新釈』の「平中日記」で、当該挿話が書かれているページ数と一致する。七一ページは「平中日記」の第九段、前栽に菊を植えていたとある段。一一二ページは同第三十四段で、厳密には「逢坂とぞついたりける」という一節は一一〇ページにあるが、一一二ページもその第三十四段の後半部分である。七三ページは同二十一一段で、谷崎のメモのとおり国経と平中の贈答歌の段である。

谷崎がこのように「少将滋幹の母」構想・執筆時に用いた宮田和一郎校註『王朝三日記新釈』は、同書を谷崎が私蔵する前か後かは不明だが、新村出からも谷崎に貸し出されていた。谷崎の代表作の一つ「少将滋幹の母」に深くかかわり、谷崎本人も一度は手にした

その書が、谷崎からの礼状を挿んだまま新村文庫に眠っていたわけである。

【注】

- (1) 『谷崎潤一郎全集』(全二十六卷、平成二七―二九年 中央公論新社)
- (2) 『谷崎潤一郎全集』(全三十卷、昭和五六―五八年 中央公論社)。(愛読愛蔵版全集)の呼称は注(1)の全集凡例に従う。
- (3) 注(1)の全集第二十六卷「年譜」による。谷崎の一月二十三日付書簡(増田徳兵衛あて)によれば、別荘に移ったのは一月二十日。
- (4) 「谷崎文学のあらゆる要素の総合であり、最高の結晶」(亀井勝一郎「少将滋幹の母」覚書)／『谷崎潤一郎読本』(文藝・臨時増刊) 昭和三一・三 河出書房)、「いつたいこの作品は、原作者としても好きな小説の一つで、今でも折々読み返すことがある」(「少将滋幹の母」再演について) 昭和三三年一月新橋演舞場「東をどり」筋書に掲載。注(1)全集第二十三卷所収)。
- (5) 長野管一『谷崎潤一郎―古典と近代作家』(昭和五五年 明治書院)
- (6) 明里千章『谷崎潤一郎 自己劇化の文学』(平成二三年 和泉書院)
- (7) 小谷野敦『谷崎潤一郎伝―堂々たる人生』(平成一八年 中央公論新社) 三四八頁には「九月七日頃帰洛」とある。
- (8) 同巻解題(千葉俊二・荒川明子執筆)によれば、この「潺湲亭」と題されたノートは、前半は「細雪」のためのノートとして戦前から使われ、後半は昭和二十二年一月から二十四年の「少将滋幹の母」執筆まで使用された創作ノートである。

※新村文庫の『王朝三日記新釈』に谷崎からのしがが貼付されていることは、大阪市立大学大学院文学研究科国語国文学専修の山本真由子先生が発見されました。このことをご教示下さり、翻刻紹介を稿者にお任せくださいました山本先生に深謝申し上げます。

(おくの くみこ・大阪市立大学大学院文学研究科准教授)